

## はしがき

中学や高校で英語や英文法を学んだとき、こんな疑問を感じたことはなかったでしょうか。「状態を表わす動詞 like, have, resemble などは進行形にできない」と教えられますが、本当でしょうか。受身文は、それに対応する能動文から「書き換え」られ、両者は同じ意味だと教えられますが、本当でしょうか。John gave Mary a diamond ring. と John gave a diamond ring to Mary. は「書き換え」られ、両者は同じ意味だと教えられますが、本当でしょうか。確かに、両者の「論理的」な意味は同じですが、それだけがすべての意味だとは思えません。

英語の勉強が進むと、「使い方がよく分からない」と感じたことはなかったでしょうか。たとえば、have は、The teacher had his students read three books. なら、「先生は学生に本を3冊読ませた」という「使役」の意味を表わしますが、make, get, let のような使役を表わす動詞とどのように区別して使うのでしょうか。It's Linda that John doesn't like. のような「強調構文」は、強調したい要素を Linda の位置に置きさえすれば、いつでも使えるのでしょうか。Mary says, "John, who is honest, never tells lies." という「直接話法」の文と、Mary says that John, who is honest, never tells lies. の「間接話法」の文は、実は意味が違っているのですが、直接話法や間接話法の文は、どのように使われるのでしょうか。

この本は、上のような英語のさまざまな文にかかわる「謎」を解き明かそうとしたものです。ネイティブ・スピーカーがさまざまな文を実際にどのように使い分けているか、それぞれの文がどのような条件のもとで適格となるかを、多くの例から具体的に示そうとしたものです。そのためにこの本では、適格な表現と不適

格な表現を比べ、その裏に潜んでいる規則を浮きぼりにします。推理の謎を解くように、この本で言葉の謎を解く楽しみを味わっていただければと思います。

本書は9章からなり、第1章では、状態を表わす動詞でも進行形で用いられることを示し、進行形がどのような場合に使われるかを明らかにします。第2章と第4章では、(他動詞と自動詞の)受身文がどのような条件のもとで適格となるかを考えます。そして第3章では、ネイティブ・スピーカーが、能動文ではなく、動作主 (by ~) のない受身文を用いることによって、相手に対する思いやりや丁寧さを示そうとする場合を観察し、動作主のない受身文の使用について考えます。第5章では、二重目的語構文とそれに対応する to/for ~を用いた文を取り上げ、両者の表わす意味が異なることを示して、それぞれがどのような場合に用いられるかを明らかにします。第6章と第7章では、使役文を考察し、make, get, have, let を用いた使役文が、それぞれどのような条件のもとで用いられ、どのように使い分けられているかを明らかにします。第8章では、強調構文の謎に迫ります。たとえば、It was Paris that John didn't go to last summer. とは言えるのに、It is Paris that John doesn't live in. とは言えないのはなぜかを、強調構文の表わす意味や「含意」から明らかにします。そして第9章では、直接話法と間接話法で意味が異なる場合を指摘し、話し手がどのようにこれらの表現に関与してくるかという視点から、両者の違いを解き明かします。

本書で解説したさまざまな文に関して、最後までもう一度まとめていますので、参考にして下さい。また、本書で考察した内容に関連して、次の4つのコラムを設けて説明していますので、参考にしてもらえれば幸いです。「上司は部下にどんな指示の仕方をするか?」、「Go up to と come up to はどこが違う?」、「Call up と

call on はどこが違う?」, 「John donated the museum a painting. は本当に『間違い』か?」)。

この本を書くにあたり、多くの方々にお世話になりました。特に Karen Courtenay, Nan Decker のお二人からは、本書の多くの英語表現に関して有益な指摘をたくさんいただきました。また、くろしお出版の岡野秀夫氏には、本書の原稿を何度も通読していただき、さまざまな有益な助言をいただきました。ここに記して感謝します。

2005 年 立春

著 者

## 目次

はしがき *i***第1章** I am liking you more and more each week. <sup>1</sup>

—状態動詞と進行形—

I am liking you. とは言わないが— <sup>1</sup>「状態動詞」は進行形にできない? <sup>2</sup>3種類の進行形とその共通の意味 <sup>5</sup>「一定不変の状態」と「意図的な一時的状態」 <sup>8</sup>

なぜ I am liking you more and more

each week. は適格か? <sup>13</sup>永続的でない非意図的状态 <sup>16</sup>まとめ <sup>18</sup>事象の「兆候」を表わす進行形 <sup>19</sup>進行形の拡張例 — 未来を表わす進行形 <sup>22</sup>**コラム①** 上司は部下にどんな指示の仕方をするか? <sup>24</sup>**第2章** 受身文 (1) <sup>29</sup>

—受身文の適格性条件—

A good time was had by all. は適格か? <sup>29</sup>《主語性格づけ機能》 <sup>30</sup>

受身文と視点	33
《総体的ターゲット性制約》	39
《状態変化制約》	44
3つの仮説の関係	48
まとめ	56

<b>コラム②</b> Go up to と come up to は どこが違う？	59
---	----

### **第3章** 受身文 (2) 65 —動作主が明示されない受身文—

なぜ受身文を使うの？	65
受身文の機能 — 動作主体をぼかす	67
動作主のない受身文はどのような場合に 用いられるか？	68
まとめ	75

### **第4章** 自動詞の受身文 77

自動詞は受身にならない？	77
《総体的ターゲット性制約》	79
《主語性格づけ機能》	82
《状態変化制約》	86
まとめ	89
日本語の受身文	90

<b>コラム③</b> Call up と call on はどこが違う？	94
---------------------------------------	----

## 第5章 二重目的語構文 101

- 2つの形は意味も同じか? 101
- 情報構造の違い 102
- 目的語の指示対象は全体的影響 106
- 意味の違い 110
- 同じ動詞でも適格性に違い 114
- 「give 型」動詞と「buy 型」動詞 115

コラム④ John donated the museum  
a painting. は本当に「間違い」か? 120

## 第6章 使役文 (1) 127

—Make と Get を中心に—

- “It *made* me smile” と “Let it snow” 127
- Have が表わす2つの意味 128
- 使役動詞の make はどんなときに使う? 133
- 他動詞文と make 使役文の違い 137
- 使役動詞の get はどんなときに使う? 140
- まとめ 145

## 第7章 使役文 (2) 147

—Have と Let を中心に—

- ホテルのフロントで 147
- 使役動詞の have はどんなときに使う?  
—被使役主が人間の場合 147

使役動詞の have はどんなときに使う？

—被使役主が無生物の場合 154

使役動詞の let はどんなときに使う？ 160

まとめ 165

## 第8章 分裂文の謎 171

分裂文（強調構文） 171

分裂文の「前提」と「断定」 173

分裂文の文脈的制約 177

分裂文の含意 182

\*It's Paris that John doesn't live in. は

なぜ不適切か？ 184

まとめ 187

## 第9章 前提と間接話法 191

直接話法と間接話法 191

「前提」とは何か 192

非限定関係節の前提性 198

まとめ 203

さらなる裏づけ 204

まとめ 208

付記・参考文献 215

## 第1章

# I am liking you more and more each week.

—状態動詞と進行形—

### I am liking you. とは言わないが—

中学や高校の英語の授業では、人の心理状態を表わす like (「好きだ」) や知覚を表わす taste (「味がする」) のような動詞は、進行形にならないと教えられます。確かに \*I am liking you. や \*This soup is tasting good. のようには言わず、I like you. や This soup tastes good. のように進行形を使わない現在形で表現します。しかし、たとえば、相手のことがどんどん好きになり、それを「告白」するときはどう言うのでしょうか。あるいは、新婚の夫婦がいて、妻の作るスープが最初はまずかったものの、「君のスープはだんだん美味しくなっているよ」と夫が妻に優しく言う場合はどうでしょうか。そうです。もちろん、次のように進行形が使えます。

- (1) a. I *am liking* you more and more each week.  
b. Your soup *is tasting* better every day.



■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

## 第2章

# 受身文（1）

—受身文の適格性条件—

### A good time was had by all. は適格か？

「受身文」と言えば、誰しも中学校以来、次のような書き換え問題でなじみ深い構文です。

- (1) 次の能動文に対応する受身文に書き換えなさい。
- Everyone loves Mary.
  - John and Mary invited her to dinner.
  - The police arrested the invader.

もちろん、正解は (2a-c) に示す通りです。

- (2)
- Mary is loved by everyone.
  - She was invited to dinner by John and Mary.
  - The invader was arrested by the police.

それでは、次の (a) の能動文に対応する (b) の受身文で、英語として正しいものには ○、間違っているものには × をつけてみて下さい。

- (3)
- John and Mary have a nice house.
  - A nice house is had by John and Mary.

## 第3章

## 受身文 (2)

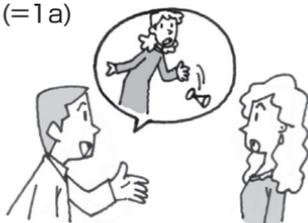
—動作主が明示されない受身文—

## なぜ受身文を使うの？

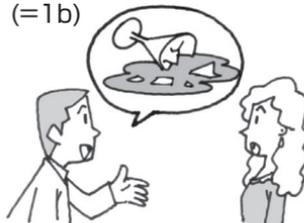
あるパーティーでメアリーがワイングラスを床に落とし、割ってしまったとしましょう。ジョンがそれを見て、ガラスの破片を集めるために<sup>ほうき</sup>箒を貸してもらおうと、その家の女主人に話す場合、ジョンは次のどちらを言うでしょうか。

- (1) a. *Mary broke* a wine glass. May I use your broom to clean the glass?  
 b. A wine glass *was broken*. May I use your broom to clean the glass?

(=1a)



(=1b)



(1a) の *Mary broke a wine glass.* は、事実を正しく述べた文ですが、ネイティブ・スピーカーは、普通このようには言いません。(1b) のように、by Mary をつけない受身文を用いるか、*Someone broke*

第4章

## 自動詞の受身文

### 自動詞は受身にならない？

第2章、第3章では、他動詞の受身文を考えましたが、さて、自動詞は受身になるのでしょうか。高校では、(純粋な)自動詞は受身にならないと教えられています。高校生用のある英文法書には、次のように書いてあります。

- (1) 受身になるのは他動詞だけである。ただ、「自動詞+前置詞」でも、*laugh at*, *deal with* のような熟語は、ひとつの他動詞と見なせるので、受身にすることができる。

確かに、(1)の記述通り、(2a), (3a)の「自動詞+前置詞」(*laugh at*, *deal with*)の能動文に対応する受身文(2b), (3b)は適格ですが、(4a), (5a)の自動詞(*swim*, *walk*)の能動文に対応する受身文(4b), (5b)は不適格で、自動詞は受身になりません。

- (2) a. Her classmates *laughed at* her.  
b. She was *laughed at* by her classmates.
- (3) a. The police *dealt with* the suspect roughly.  
b. The suspect was *dealt with* roughly by the police.
- (4) a. John *swam* in this river.

## 二重目的語構文

### 2つの形は意味も同じか？

中学や高校では、(1a), (2a) のような二重目的語構文が、それぞれ (1b), (2b) のように書き換えられ、両者は同じ意味である、と一般に教えられています。読者の方々も、このような「書き換え」練習を何度も行なったことを覚えておられることでしょうか。

- (1) a. Mr. Smith *taught* us English.  
 b. Mr. Smith *taught* English *to* us.
- (2) a. Mary *threw* him a ball.  
 b. Mary *threw* a ball *to* him.

しかし、両者は本当に同じ意味なのでしょうか。(1a, b) では、スミス先生が話し手たちに英語を教えてくれたのですが、その結果、話し手たちは英語に熟達したのでしょうか。あるいは、単に教えてくれたと言っているだけで、英語に熟達したかどうかについては何も示唆していないのでしょうか。二重目的語構文とそれに対応する (1b), (2b) のような文で意味が違うというのは、(2a, b) の him を the fence にしてみると、次のように適格性が異なる点からも明らかです。

- (3) a. \*Mary threw the fence a ball.

## 第6章

## 使役文（1）

—Make と Get を中心に—

## “It made me smile” と “Let it snow”

日本語の「～させる」という使役の意味は、英語ではさまざまな動詞で表現されます。カーペンターズの歌“Yesterday Once More”の中の歌詞 It made me smile（や It can really make me cry）の make、ビートルズの歌“Let it be”やクリスマスソングとしてよく歌われる“Let it snow”の let などは、その典型的なものです。

(1)

When I was young

I'd listen to the radio

Waitin' for my favorite songs

When they played I'd sing along

*It made me smile*

若い頃には

よくラジオを聞いていたわ

好きな曲を待ちながら

その曲がかかると一緒に

口ずさんだりしたわ

楽しい気分になるのよね

(2)

Oh, the weather outside is frightful,

But the fire is so delightful,

And since we've no place to go,

*Let it snow, let it snow, let it snow.*

ああ、外はひどい天気

でも暖炉の火はとても暖か

どうせ私たちは

行く所もないし

雪よ降れ、降れ、雪よ降れ

第7章

## 使役文 (2)

—Have と Let を中心に—

### ホテルのフロントで

スーツケースを持った日本人旅行者が、やっとアメリカのホテルにたどり着き、チェックインをすませたときに、受付の人が次のように言ったとします。

- (1) あなたのスーツケースをボーイにお部屋まで運ばせましょう。

I'll ( ) the bellboy carry your suitcases to your room.

( )にはどのような単語が入るでしょうか。受付の人が言った「(スーツケースをボーイに) 運ばせる」は使役表現ですが、前章で考察した make や get とは違って、( )には have が入ります。なぜ、このような場合には have が用いられるのでしょうか。Have は、make や get とどこが違うのでしょうか。本章では、have と let に焦点を当て、これらの使役動詞がどのような場合に用いられるかを明らかにします。

### 使役動詞の have はどんなときに使う？

#### —被使役主が人間の場合

まず、次の2文を比べてみましょう。

## 分裂文の謎

### 分裂文（強調構文）

英語には、次の (1b, c) に代表されるような「分裂文」(It-Cleft) と呼ばれる構文があります。この構文は、学校文法では「強調構文」と呼ばれてきました。

- (1) a. John hates Mary.  
 b. It's Mary that John hates.  
 c. It's John that hates Mary.

この構文は、(1a) のような普通の文から、1つの強調したい要素を取り出してその文から「分裂」させ、“It is/was X that/who...” の X の位置に置き、取り出された要素が欠けている文を that/who の後ろの ... の位置に置くことによってできる構文です。

分裂を受ける要素は、(1b) では、動詞の目的語の Mary、(1c) では、動詞の主語の John です。そのほか、前置詞の目的語、前置詞句など、さまざまな文法機能の要素が分裂文の X の位置に現われることができます。

- (2) a. John showed the picture to Mary.  
 b. It was *Mary* that John showed the picture to.  
 c. It was *to Mary* that John showed the picture.

## 前提と間接話法

### 直接話法と間接話法

大学の英語の試験に次の問題が出たとします。

- (1) 下の直接話法の文を間接話法の文に書き換えなさい。
- Mary says, "John never tells lies."
  - Mary says, "John, who is honest, never tells lies."

おそらくすべての学生が、次のように答えるでしょう。

- (2) a. Mary says that John never tells lies.  
b. Mary says that John, who is honest, never tells lies.

先生は、まず間違いなく、上の回答に百点満点をつけることと思います。ところが、実は、(2b) は間違った答えなのです。どこが間違っているかという点、(1b) では、「ジョンは正直である」と思っているのが、メアリーなのに対し、(2b) では、そう思っているのがメアリーではなく、この文全体の話し手であるという点です。言い換えれば、(1b) では、メアリーが「ジョンは正直である」ということを「前提」(Presupposition) としているのに対し、(2b) では、メアリーではなく、この文全体の話し手がそれを「前提」